

東洋書院藏  
東洋書院藏  
東洋書院藏

本地 東洋書院藏

第四回 印度の事

東洋樓主人 纂輯

斯て浦嶋屋らコル子ル先生の案内より荒増  
支那領分の國々を繞りおれより南に向て印  
度の方に至らんとするに當り「浦嶋屋先生唯  
今より参りませる印度と申を如何様國柄下

七里勿吾

〇一

御坐りコルナナルナルホド印度とコルナナルなり申  
 てを解り兼るが之を往昔天竺と申たる國は  
 て亞細亞洲のうち南部に當る大なる二つの半  
 嶋を合せていふ名で御坐るが其内をコルナナル前  
 印度後印度の二部は大別して御坐る。唯今  
 まつる處を即ち後印度の方として其東を支那  
 國に隣りし北を西藏に界し西の方を孟加拉  
 灣とコルナナルしつる入海を隔て前印度は向し地面を

十四万七千七百万坪余もあり其内は安南  
 暹羅緬甸杯と申皆獨立の重なる國々が有り  
 その外もラフス、マレー、英吉利領分  
 のテナセリユムと申細長き國などが御坐るが  
 之は獨立の國であく人民も至て野陋で御  
 坐る  
 安南と申は後印度の東の岸を領し北部の地  
 を東京と申し南の方を東蒲寨と申日本一藥

種杯の澤山ありある處で御坐る此處んち日輪  
 の真下より近き所にて氣候何つきゆる御覽の  
 通り土地を豊饒よく又樹林澤山あるゆる珍  
 木を夥く産し就中米綿藍煙草其外琥珀大理  
 石肉桂杯を此國の所々より以て象犀虎の様  
 なる猛獸も甚ど多し御坐る住民を都て六百  
 万人も有るものども其内マレー半島の外を  
 印度人と支那人よりて衣服も皆支那の古製を

用ひ氣候何つき  
 處ゆる婦人杯を  
 何の通り腰より衣  
 服を蔽ふむろり  
 でござる此國の  
 首府をフエーと  
 申支那より向ふた  
 る海岸より人民



五万余も有り國王の宮殿も金銀をあり  
むめ美麗を盡して御坐る

暹羅より小國を緬甸の南より安南に隣り東

西より大山を帯びたる土地柄より國よて其

廣さ凡三万七千坪人民も三百万余も御坐れ

ども風俗陋しく御覽の如く半裸跣足よて歩

行し且此國よて人をも賣買し之を終身買切

り半馬の様よ使ふの惡風が御坐る「浦島屋へい

それら恐ろしく所で御坐りまを又彼の阿

まの奇あのとく口唇の黒の如何しので御

坐りまを「コルナル」阿れる此國の風よて他國の

人の煙草をまよが如く擲擲の實をかむよ

り彼如り口唇が黒くされあくありまを又阿

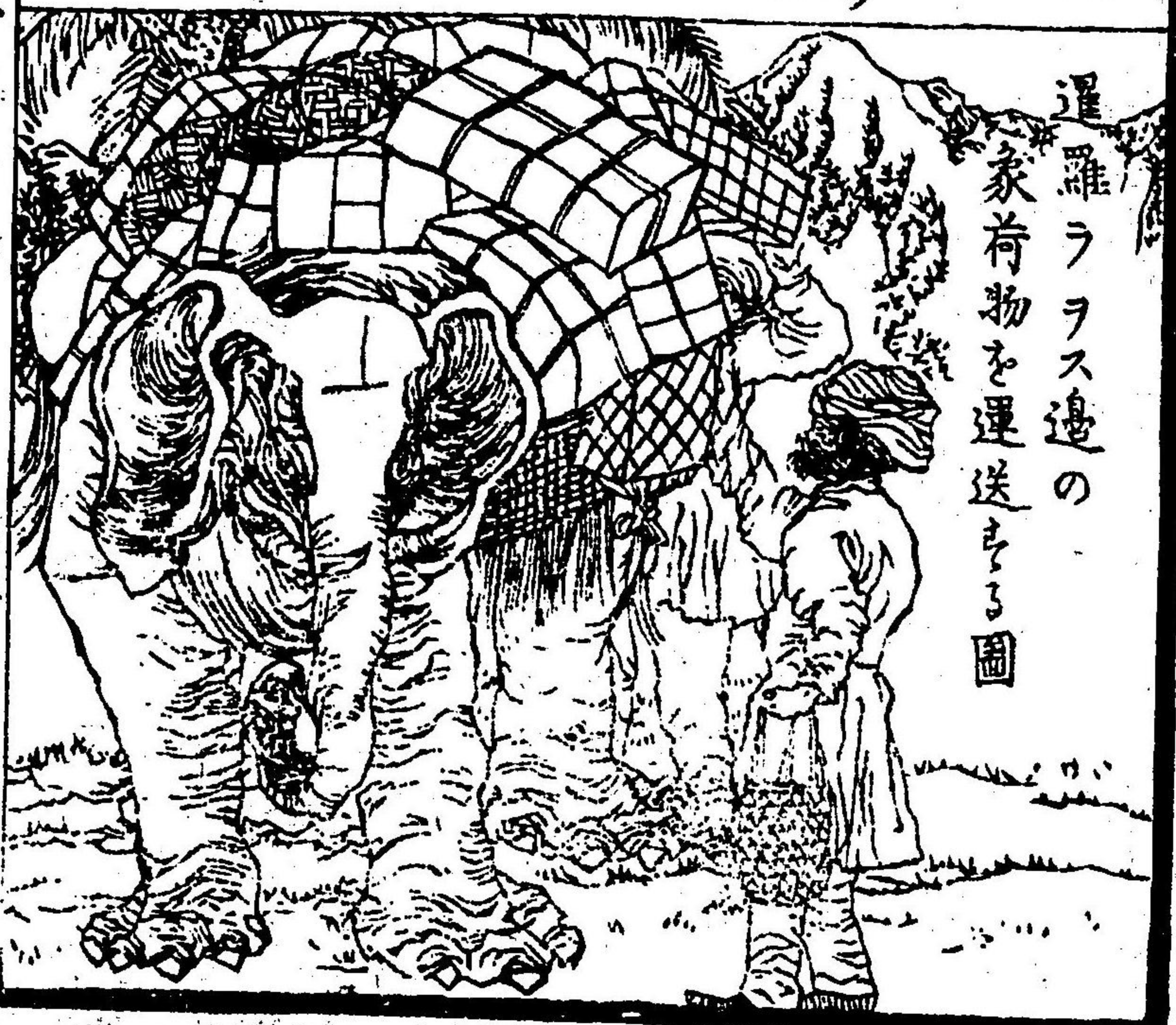
の頭髮を此處の風よて皆兩ひんより後ろ

を剃却し前頭より頂上を断髪よを其状実よ

奇ありまを此國の首府を萬國と申斯如く人

家も建續る人数の四十万も御坐るが其内半  
 方を河の遙く見る如く河上は筏を造り其上  
 一家を建皆河の上に住居て潮の差引に従ひ  
 上下は流れて居るを是を世界は珍らしき見  
 物でござる此事を萬國奇談と申書は委しく  
 解てゐるのが閑暇のとき御覧なされしは是  
 より北の方へ参ると「ラス」と申國がござる  
 が此國の人民の智識も閑けを唯其所々の首

長は従て支配を  
 受け又を暹羅や  
 緬甸は属する處  
 も御坐る此邊の  
 國々よる世界中  
 は一番大なる象  
 多きゆゑ皆象は  
 て荷物をを色び



暹羅ララス邊の  
 象荷物を運送する圖

或を耕作を致し、是より、ちと急で緬甸の方より止百理亞杯と申寒國の方一廻りま

せふ  
此緬甸と申を元強き國でござつたが近年英

國と度々戦て領分を大分取れ、由る現今は

漸く領分四万四千坪人民は八百万許こそ

御堅らぬが其も皆開けぬものをこのりして斯

如り男女とも平常裸躰して恥を去らざる位

あれども産物ハ材木象牙金銀等澤山で御堅

る。是より前印度の部内よりありしを此前印

度と申を即ち天竺國として其北を喜馬拉山の

續きよして界し西をアフガニスタンベルチス

タンに接し印度海中に突出したる國として廣

さ三十三万二千坪余も有り人数を一億七八

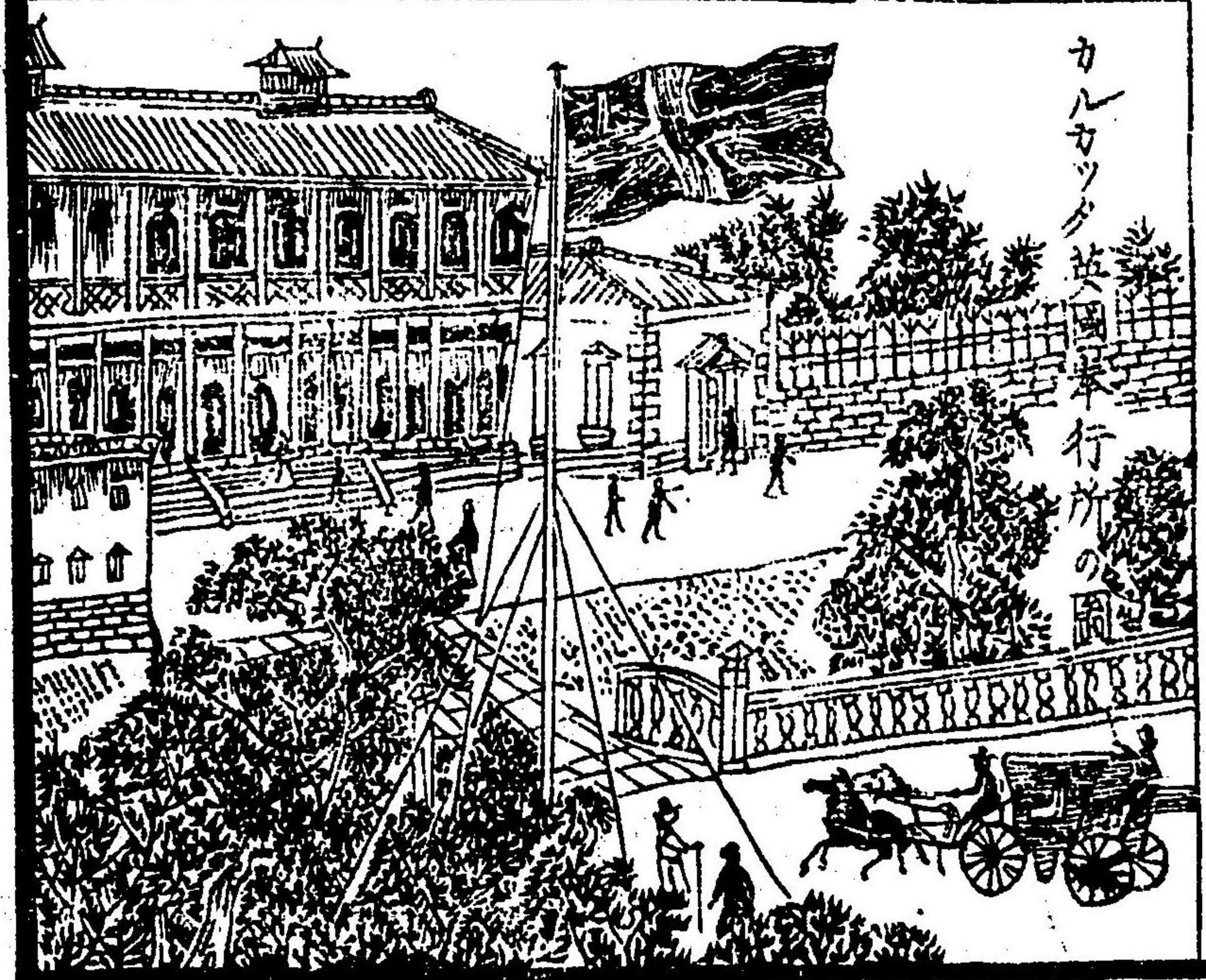
千万もあれども其内大抵を英國の領分で御

堅る此國を山地多けれども間々世界に名高

沃野ありて産物甚多し就中ヒンドスタ  
ン杯を格別よき上地也英國より年々取上  
る高二億三四千万ドルありと申を此國の人  
民を大抵印度人とり元より此國の土民  
て容貌壯偉禮義を貴び諸藝に精く且つ梵字  
もて書し物りろ御坐る又人民一般に神佛  
を信仰し種々の偶像を造て尊拜し神佛は迷  
ふ事と尤多し且此國を釋迦の生れたる所と

りと申を殊に此國の惡風と申をガングス  
と申す大河に身を投て死するものを後生  
の富貴の家と生る杯と申して身自の  
溺死する者多く又夫の病死する時其妻自  
ら火中へ飛込で死するものあり近年英國  
より嚴しき令を出して之を禁むれども未  
全く止まぬと申す。甲谷他と申す首府を  
シゴールと申す州のうちを安額河の口と

り英國鎮臺の官  
 局ありて造築甚  
 ど羨しく人民五  
 六十万も有り殊  
 又交易盛りて此  
 所より所々又  
 鐵道を敷き西洋  
 へ替る事もござ



カルカッタ英國奉行所の圖

らぬ然し土人の居宅と云ふことと陋く貧窮  
 の有様見るに堪ざるもの澤山御坐るに孟  
 買と申る甲谷他よ次たる交易盛の都府よて  
 人民五十万余も有りて萬國の船の立寄る處  
 で御坐る是より百里余を距て錫蘭と申る大  
 鳴がとざるが是も元々葡萄牙の領分あり  
 が今を英國に屬し隨分豊饒の地も多くその  
 産物を象牙材木寶石類澤山あり此鳴が即ち



釋迦如来誕生の地ありと申す

第五回 比耳西亞國并亞細亞西方諸國の事

「コル子ル浦嶋屋さん是より比耳西亞國の領分は相成るを此比耳西亞と申す裏海の南土耳其の東より大國まで地面七万五六千坪あり人民を凡千二三百万あり氣候を甚く暑く椰樹檳榔のほろ草木を見るあり甚く稀で御坐る方西の方の地は高山連り其間より

草木の繁茂なる處も澤山あり且民を力を盡して土地を耕作するゆゑ食物は不自由でも御坐らぬ。此國の政治は立君特裁と申す國王の意に任せて下民を勝手次第に取扱ふ風儀もて王の都府をテヘランと申し甚く暑き處で御坐る此國の領分は甚く廣く亞加業坦俾路芝杯も皆其版圖なりとも沙漠の地多く人民を大抵盜賊杯を業とを故に此邊を通り

交易をなす者ハ  
 皆数人隊を組テ  
 往來之を隊商  
 と申ス。○此國の  
 人種もいろいろ混  
 トて一様あらず  
 れども風俗も大  
 抵土耳其に近く



比耳西亞人風俗

一般に田々教を奉一男よて教婦を娶る風  
 あり且華羨を好み衣服杯より金銀を飾る

○土耳其斯坦

浦嶋屋は是より先を土耳其斯坦より  
 獨立鞏固とも申し比耳西亞國と裏海との  
 間にある國よて地性を都て宜しうなび内地  
 にも慶々よ廣漠の荒野あり其處の人民も  
 黨を組み水草を逐て先々よ移り馬肉を食ふ

者有りとは氣候を夏甚ど暑く冬を甚ど寒し且  
雨のふるまはと少く連年旱魃のまはと少し  
然し唯東南の地を稍膏腴の地有りて綿絹糸  
五穀稟實黙毛を産し羊を畜ふと殊に盛なり  
り且隊を組みて南の方アフカニスタンの産  
し一交易は出かける者多し又府内は奴隸を  
賣買をる市場が有ると申す

○ 亞細亞土耳其

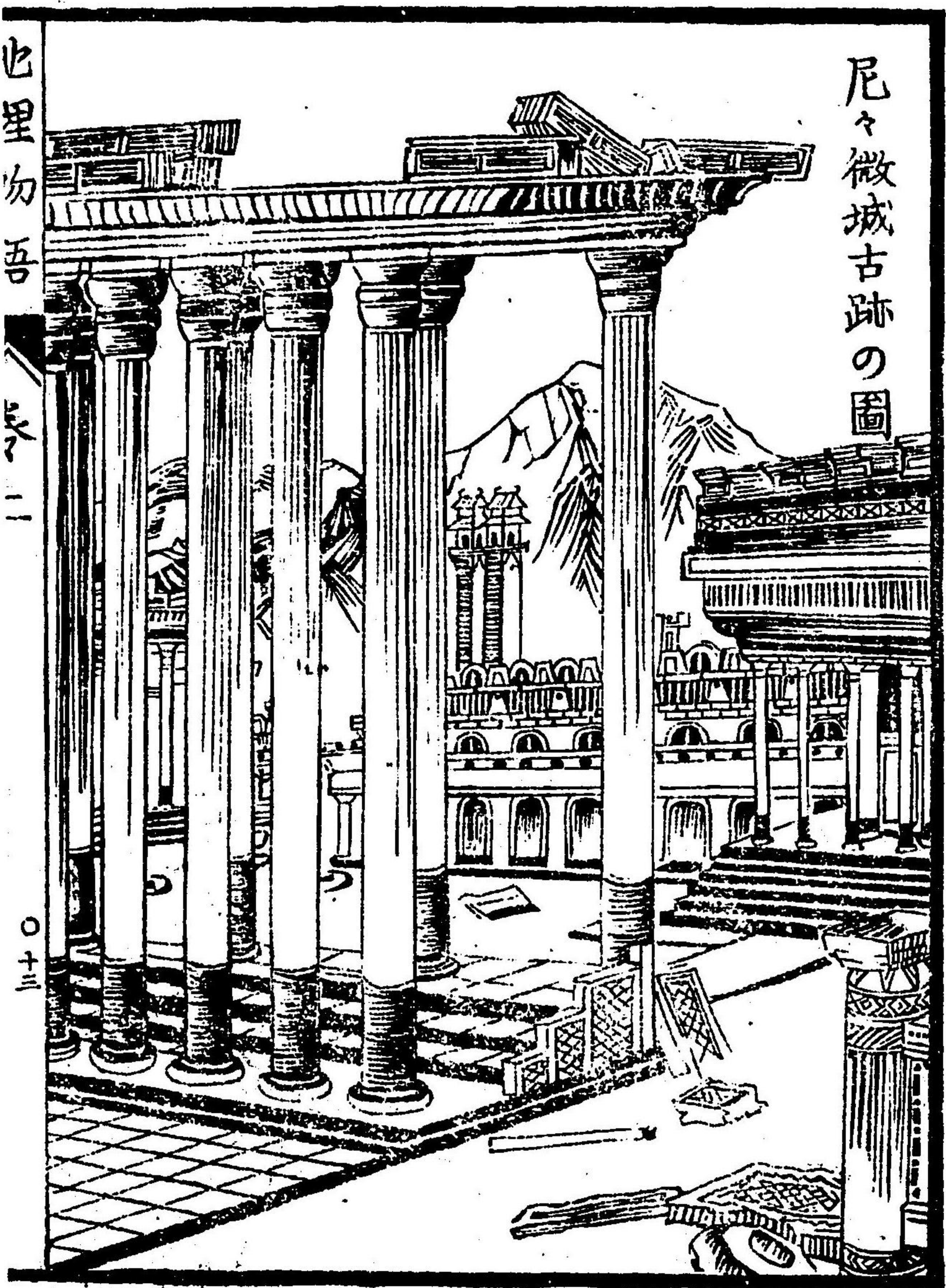
浦島屋 先生是より亞細亞土耳其たと仰ら  
れしが亞細亞と土耳其と一所の國て御坐り  
するをウラルナルホド亞細亞土耳其と申して  
ちちと解りよくいぐ一休土耳其といふ國を  
魯西亞と同トまとして亞細亞と歐羅巴と兩  
洲に跨るゆる亞細亞洲のうちにある土耳其  
の領分を亞細亞土耳其と申し之は黒海  
と亞拉比亞との間にある大國として地方十一

万二千坪人民千六百万有り地面は大抵山  
脈多く西南より沙漠多し色ども地性を一般  
に豊腹で御坐る其山手の方を氣候寒く濕氣  
を含めども平地を暖和する人々快よ此國  
及人民を耕作は力を用ゆる多と少く毛氈草  
等を製し他國に輸出を此國中より一番繁盛  
するを西岸より河スミカナとリ首府より  
西洋諸國の船盛に入港み交易も随分繁昌で

御坐る。此國のうちを死海と申して世  
七不思議の一ある大湖有り其水を塩分多し  
大小の魚類取て生むる多とあり又此國の内  
に猶太と申し大古著名に猶太人の古國有り  
殊に洋教開祖の生れ玉ひし地あり名所古  
跡も澤山あり一々お断る出来切りをせん。  
此國の内部を通りて流るる二の大河有り其  
西をユーフレート河といひ東をチクリス河

とりよ此二河の邊に世界の人間創めて産れ  
 其後大洪水よて人畜消亡し再び人民榮へて  
 紀元前二千二百二十一年アツシリヤ帝國始  
 て興り且亡ひし場所亦大古世界中に比類な  
 き大城の巴比倫および尼々微等の古跡今尚  
 存し實に筆紙に盡されせん此等のあと其  
 外世界七ふしぎの一ある空中の釣園杯のあ  
 とも皆萬國奇談と申を書よ参りく解て御堅

尼々微城古跡の圖



山 伐 田

るまゝ此國の東北に當りて高加須とよ山  
あり所謂高加須人種を此山間より出ると申  
を

○ 亞 拉 比 亞 國

是よりを亞拉比亞と申を國として護謨馬杯の  
澤山出る處で御坐る此亞拉比亞國を亞細亞  
洲の極西南より申して是よりを順覽しつゝなる  
亞細亞土耳其の南よりなる半嶋で御坐る此

國の海岸を低き土地なれども内國より平地  
多く其平地も大抵は樹草水河もなき沙漠に  
て耕作もせず地も御坐らぬ國の廣さを二十  
万坪余人民を凡五百万もこざる大抵開け  
ぬ野民をして定りたる家もなく皆馬駱駝杯を  
飼ひ数人一組とあり各天幕を家として水草の  
ある方を索て住所を移し或る盜賊を業とし  
旅人を掠むる者多し故に此沙漠を通ふ旅人

其のあたりに其  
 地の人を案内  
 頼み途中の  
 守護と為され  
 バ盗賊の為  
 一命を捨る  
 と少くも又  
 此沙漠を旅行



亞拉比亞人  
 沙漠中、天幕を張りて宿る様

くる者も駱駝に駕り隊を結び道の標的とを  
 置き物も亦も磁針を以て方角を定めて  
 行くと恰も大洋中へ航するが如くで御坐る  
 然し十二三里位の内は少く草木の生ずる  
 處も有るゆゑ茲は駱駝の荷を解き天幕を張  
 りて夜を明を依て駱駝を沙漠中の船と唱へ  
 ながて叶すぬ獸で御坐る。此國の民半分は  
 右の如く野民多けれども半分は相寄て村落

を為し且麥加と申き此國の首府を即ち回々  
 教の先祖「マホメット」とりよ人の生れし地也  
 回々教の門徒をまゝを靈地となし「マ」麥地  
 那とりよ府を「マホメット」の死たる地にて今  
 銀を飾りたる堂宇あり此國の産物を第一  
 馬駱駝護謨珈琲其外藥種類澤山して他國  
 輸出を去と最も盛で御坐る。マ、亞拉比亞  
 とベルゲスタンとの間を「ア」モンの灣とい

ふ此處より  
 大ひなる真珠貝  
 を生むる故に毎  
 年六月より九月  
 頃までアラビヤ



「ベルシヤ」「インド」等の土人数万集り来り真珠  
 を採りて交易物と致し

第五回 西北利亞國の事



コルネ浦鳴屋さん是より少一跡へ戻つて亞細  
 亞洲の極北の西比利亞と申を極寒の國の方  
 を一覽せれば最早亞細亞洲を大抵ひと廻り  
 致しよまを浦島屋へイ是の跡へ戻つて寒さ  
 國へよくるの甚ど難澁で御堅りなまを然  
 一西比利亞と申を名所でも澤山ある國で  
 御堅りなまをコルネイ、エカカク名所杯を  
 く唯雪をこのり降る荒地で御堅るのさ茲よそ

一ト通りお咄を申し直は歐羅巴洲へ渡りま  
 せよ歐羅巴洲を皆世界の文明國で御堅るの  
 ら又環しあとも澤山ござる扱西比利亞國  
 を亞細亞洲の北地全部の總称して皆魯西亞  
 國の領分也よ亞細亞魯西亞とも申し東  
 西の長さ千四百七十里南北の幅七百三  
 十里余あり地面を大ある平地より北氷海  
 向て傾くゆゑ多くの江河皆北氷海へ向て流

此邊の氣候  
最も寒きゆゑ  
五穀も登あさ  
荒地多く殊に  
半年余を雪の  
解るまともあ  
さ慶かれども  
獸類澤山ゆゑ



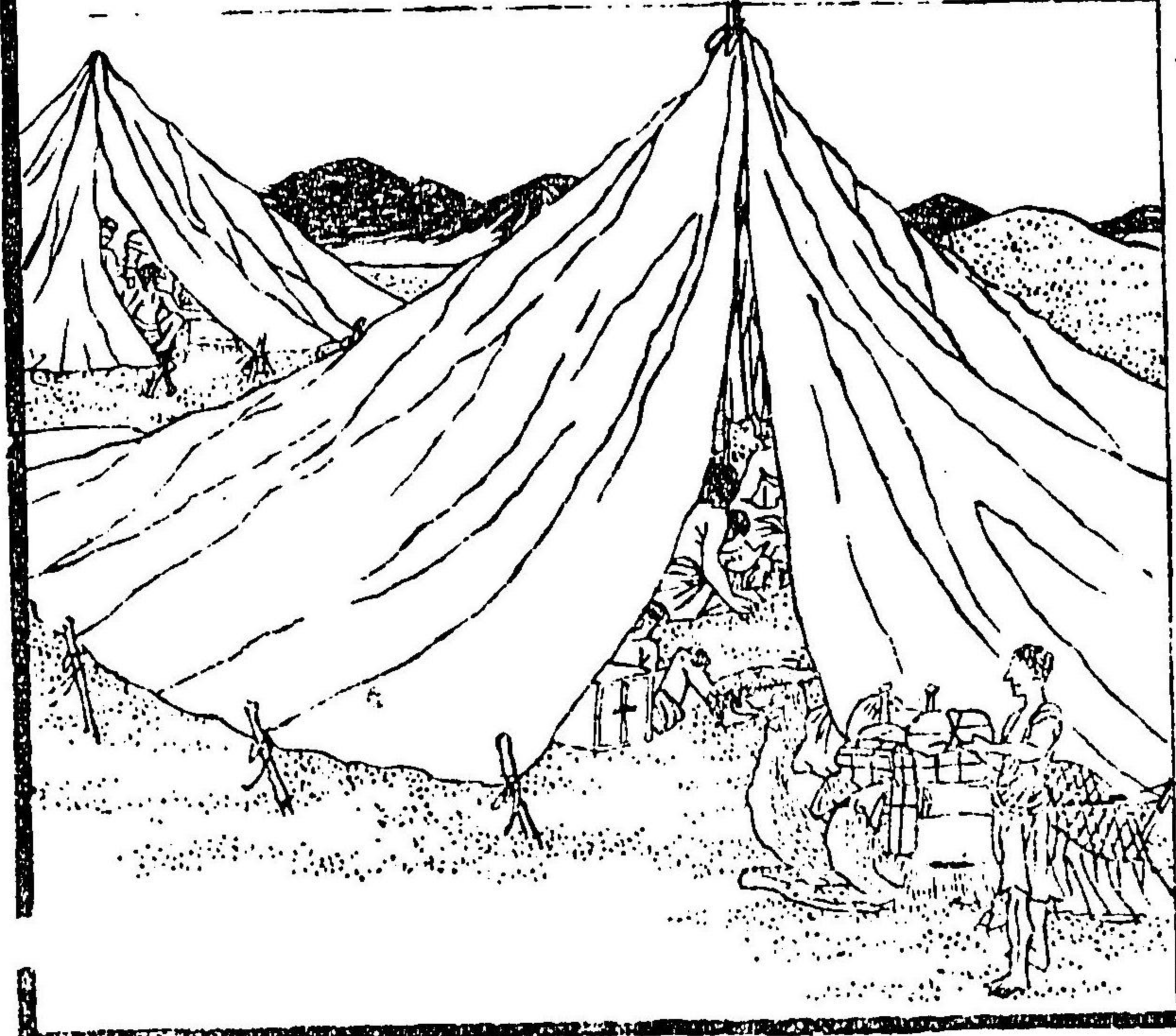
馴鹿も毳車を牽いて  
西比利亞の雪野を旅行する圖

土人の漁獵を業と一或は水草を逐て居所を  
移る者有り此處より馴鹿と稱する鹿の種  
類もて角の大なる獸有りて好し人又馴るゆ  
ゑ之は毳車を牽せて雪野を旅行し其肉を食  
ひ其皮を衣又極僻遠の地は居る者も冬に至  
れば穴を掘りて土中は住居し極開けざる者  
が多ふ御坐る然し此處より猶北の方に至  
れば北氷海と申世界の一番北のまがれりて

海中も氷の解る間も少く日本まで暑中も賣  
る氷も皆此處より持来るので御座る新く  
寒氣の嚴しき處まで人の至るあとも稀ある  
ゆゑ土地の模様も好くも知れませを唯原野  
といくども草木の生る様も所も御座らぬ  
○此西比利亞の地方も元魯西亞の本部より  
罪人を送り鑛を鑿り獸を獵するを以て業と  
し其扱も往古も甚ど残酷でござつゝ近年

を緩むるは相成るゝ〇トホロスクと  
申すも西比利亞の首府もて人数一萬二三  
千も有り寺院學校製造所など有りて交易甚  
ど盛で御座る〇トムスクと申すも隨分繁昌  
の都府もて住民一萬二千兵學校など有り  
且此處より毛皮を出せると甚ど多く各國も  
名高き品物でござる又西比利亞の西南も  
大抵沙漠の原野も樹木も生ぜぬ水も乏し

くして耕作  
産地も亦く  
土人と遊牧を  
業とし其内は  
酋長ありて  
之を支配し未  
だ政府の管轄  
に属せざるも



のあり其中は盗賊を業とし隊商などを劫  
掠し或を勾引して奴隷に賣る者あり実は恐  
ろしき處で御坐る又「イルコスグ」と申ハ東西  
比利亞の首府として交易甚ぶ多く全國中の一  
番繁昌の地として地勢景色甚ぶ好く且鎮臺の  
役所其外毛織製造所市店など頗る羨麗で御  
坐る「ヲコースグ」と申ハ日本の北蝦夷と堪  
察加の間はありて亞米利加の北地杯と交易

を致<sup>し</sup>を處<sup>と</sup>で御坐<sup>り</sup>る又堪察加<sup>カムカッタ</sup>と申<sup>ま</sup>わ此國<sup>このくに</sup>の東<sup>ひがし</sup>  
 の端<sup>はし</sup>より海中<sup>うみちう</sup>又突出<sup>トキダ</sup>したる半嶋<sup>はんたう</sup>より其南<sup>そのみなみ</sup>の  
 端<sup>はし</sup>を日本<sup>にっぽん</sup>北蝦夷<sup>きたしやい</sup>の嶋<sup>しま</sup>續<sup>つづ</sup>きある「クナシリ」エト  
 ロフ<sup>ロフ</sup>は連<sup>つ</sup>なる高山<sup>こうざん</sup>多くして獸類<sup>じゅうるい</sup>甚<sup>お</sup>ぶ多<sup>お</sup>し土<sup>と</sup>  
 人<sup>ひと</sup>を皆開<sup>ま</sup>けざる野民<sup>やみん</sup>より常<sup>とこ</sup>に狗<sup>いぬ</sup>を使<sup>つか</sup>ひ物<sup>もの</sup>を  
 運<sup>た</sup>ぶ此嶋<sup>このしま</sup>の都府<sup>みやこ</sup>をベトロポルス<sup>ベトロポルス</sup>と<sup>と</sup>りく東<sup>ひがし</sup>  
 の海岸<sup>うしづみ</sup>よりりて魯西亞<sup>ろしや</sup>國<sup>くに</sup>海備<sup>うみび</sup>肝要<sup>かんよう</sup>の地<sup>ち</sup>ゆゑ  
 炮臺<sup>ほうたい</sup>を築<sup>ま</sup>き堅固<sup>けんこ</sup>の備<sup>そな</sup>へが御坐<sup>り</sup>る近年<sup>ここのへ</sup>セバ<sup>ス</sup>

トボル戦争<sup>トボルせんそう</sup>  
 の始<sup>はじめ</sup>英佛<sup>えいふく</sup>の  
 軍艦<sup>ぐんかん</sup>此處<sup>このところ</sup>を  
 攻<sup>せ</sup>たるおと  
 杯好人<sup>はいごうじん</sup>の知<sup>し</sup>  
 る處<sup>ところ</sup>で御坐<sup>り</sup>  
 る先<sup>ま</sup>あれで  
 西比利亞<sup>せいべりや</sup>の



トボル戦争

の

の

あとも大抵一ト通りのお咄しを濟す御  
覽の通り亞細亞洲を世界中よて一番古く始  
て人種の出来たるも孔子釋迦基督マホメット  
杯の如き全世界に著名き人の生れたるも皆  
亞細亞洲よて英吉利佛郎西等よハ未だ親子  
の別も知らざる野民の住居する時分より文學  
盛に行なわれ世界中の祖國ともりか蘆を  
今ら却て頑愚に至り往古野民と唱へ西洋

諸國を以て今を世界の文明國と稱を呼鳴人  
智の變遷國家の勃興ハ謀られぬもので御堅  
る先一ト休み致して直に飛脚船に乗り歐羅  
巴洲へありませよ亦歐羅巴洲を世界の文  
明國とも申慶せよ環らさるる澤山  
御堅る

地理物語初編下終

萬國名所めぐり

一 地理物語

初篇 亞細亞洲

出来

一同

二篇 歐羅巴洲

續出

一同

三篇 亞米利加洲

續出

一同

四篇 亞非利加洲  
大洋洲

大尾

東京書林

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

外

須原屋茂兵衛

山城屋佐兵衛

和泉屋市兵衛

須原屋伊兵衛

村上屋勘兵衛

藤岡屋慶治郎

森屋治兵衛

山口屋藤兵衛

椀屋喜兵衛

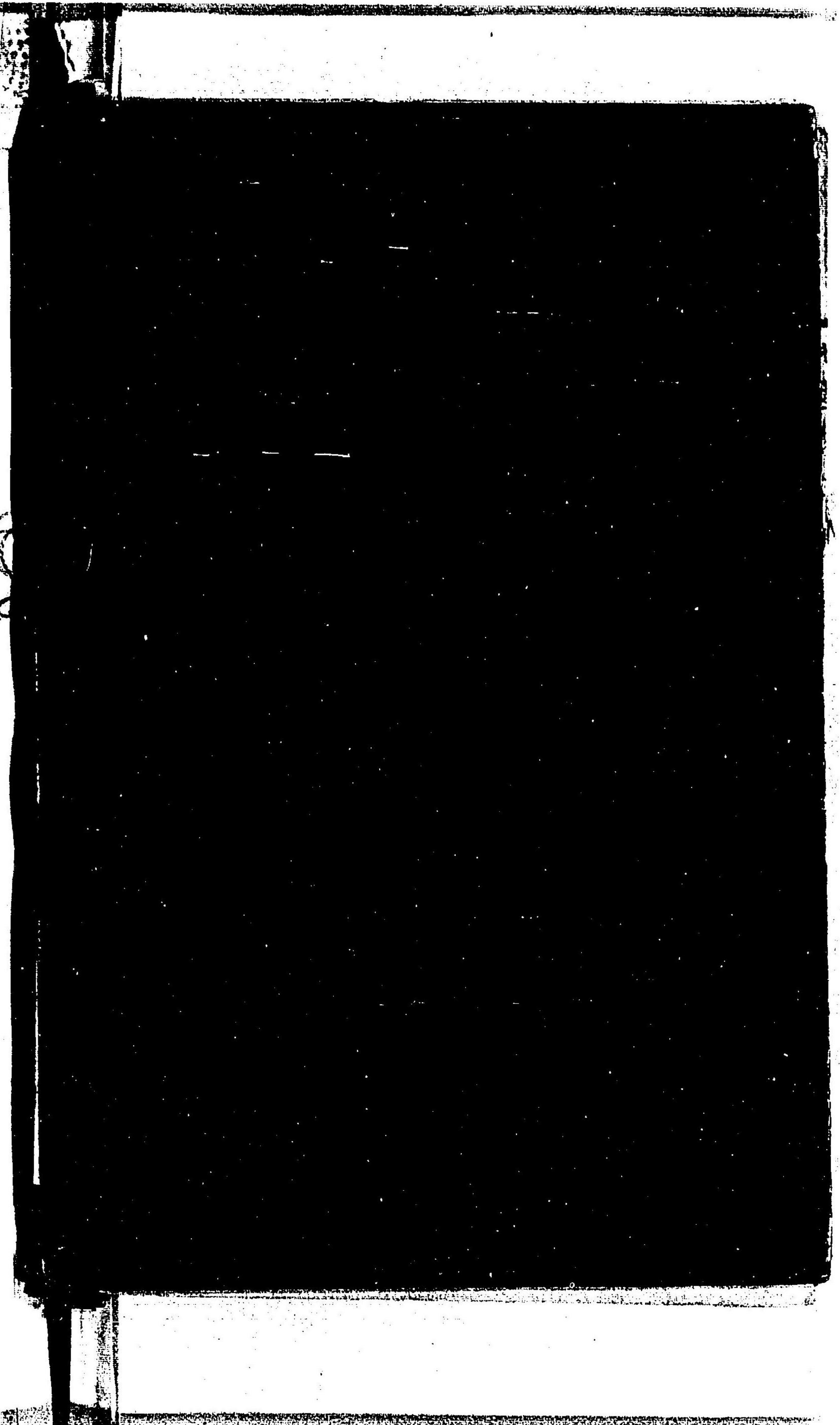
鈴木喜右衛門

紀伊屋源兵衛

若林喜兵衛

紀伊屋才助板

外神田御成道





特 38

63



共  
二  
本